

■ 研究所だより

上平 泰博

安藤昌益から学び直す

米国TPP農業戦略は、大量生産方式であることから、結局のところ限りなく安価な食料供給先として市場の独占支配を使命としている。毎日ジャンクフードばかりを食べさせられ、しだいに健康維持することも難しくなって、医薬品業界主導の薬漬け生活を日々送り、人間が餌を食べさせられている映像シーンが、錯覚でもないことを思い知る。

なにをどうすれば、この潮流に対向して這い出ることができるのか、消費者とともに日本の農業のありようが今も問われている。TPP農業という「黒船」が断続的に日々上陸して来るから、日本農業も大中規模の企業経営で対抗させるという農政があるそう。そうなっても米国安売り農産物競争には負けてしまい、国内産農業産品は高付加価値でもないかぎり生き残れず、高価で安心安全な農産物商品しか残らないから金持ちしか買えず、新鮮な青果物も市場から撤退してしまい、枯渇するという地獄絵図がまことしなやかに描かれている、そんな小説もあるらしい。

農業が「生業」で第一次「産業」であるというなら、競争と効率を強いられよう。金儲けする人たちの経営手段にされるのが資本主義のルールである。この国家市場原理を前提とするなら、政府の強力な保護政策が多様にあったにしても、日本の小規模農業はなくなるというのは、確かに現実性

をおびてくる。

しかし、儲けるための経済行為としての商品価値でなくてもいい農産物なら、つまり農業のみを「生業」とはしない就農外兼業も可能であるなら、食糧の自給自足で自分たちの命を確実に守れる、最も身の丈にあった農業は、やはり「小農」とか「家族農業」なのではないだろうか。あるいは「コミュニケーション農業」だと訊くこともある。

ワーカーズコープの組合員から、今のところ山下惣一さんのような強靱な農民(作家)のイメージなど想像できないし、地域社会から断絶をも覚悟した有志農業者のみを対象とする協同労働型の隔離コミュニケーション農業などもめざさないだろう。

すべての日本人が、なにも農業プロパーである必要はない。自分たちの安心安全な作物を自給レベルでつくる「ダーチャ」農業のような「皆農」が広がれば、周りに土のない都市生活者を除けば、TPP農業が押し寄せて来ようと無関心でいられる。自給できる人は、農産品など買わないであろう。

年金生活者の趣味としかまだ見られていない、「半農半X」が拡大していけば、つまりは都市生活を見捨て「地方創成」に同調する若い人たちが、「百業」や「百姓」を身に纏い、循環型FEC自給圏をめざす方向へと進むなら、古来これが人間本来の自然な生きざまであると後追いでいいから自覚できるなら、この国に存在することの価値は大きく変わるだろう。

そう考えていくと、安藤昌益の思想が現代に甦る。すでに250年も前に昌益は鋭く洞察していた。「転人一和ノ直耕」すなわち「自然と人間の調和」(自然世)が重要であるとする考え方だ。これを実現するには、「直耕」(ちよっこう)すなわち農業においてないと悟る。

昌益は、全ての人が自ら働いて、貧富の差も上下の支配関係もない平等な農業社会を「自然世」(自然と人間の営為が矛盾なく統一された理想社会)だと考えた。昌益は驚くべくことに「陰陽五行説」の影響を受けながらも、エネルギーの根源である「活真」が自己運動することで進んだり退いたり動いて、「進」の内に「退」を含み、「退」の内に「進」を含むという、相互に内在する「互性」関係を有する運動やそのはたらきを「進退」というコトバの概念へと発展させた。

万物には異なるものが相互に依存し、かつ相互に相手の本性を内在して作用する男女の本質、天と地なども差して変わらないとする。この「互性」関係論は、あきらかに自然弁証法と唯物論だといえる。

「互性」原理を「五行説」(木・火・土・金・水の構成元素)から適用しているが、土を中心に物事を内部から突き動かす真の力「土活真」を他の四行(木・火・金・水の四元素)で統括することにより、「土活真」が根源的存在であるとした。

これは、陰陽五行説の土王説(土は他の中間に位置する作用)に接近した説といえるが、昌益のように土を根源的な存在と認

めるかどうかで大きく異なる。この元素が相互に作用し自己運動化することで「八気」(天地雷風水火山沢のエネルギー)に循環して、宇宙・自然の森羅万象が調和と有機的関係のもとに営まれるのだとした。

昌益は「人ハ自然ノ全体ナリ」(自然世)といったように、「転定」(大宇宙)に対して、人間(男女)をも「小転定」(小宇宙)にとらえた。しかも「転定」と「小転定」は相関しており、「土活真」の展開となる四行説の作用、つまり「転定」の「直耕」(自然のはたらき)では、「小転定」たる日常においても、炉における煮炊きや顔面において目の前で確認できるとした。

すべての根源的存在が「土活真」という一元論は、万物は等価・同等で平等なものとなる。昌益は、等価・同等なものを人為的に差別することを「二別」と名づけきびしく批判した。人間や動物にとって欠かせない食物の獲得は、人間や動物の「直耕」にほかならず、食物を生産する農業やそれに従事する農民を最も尊ぶべき存在とした。子孫を残すための男女の交合も種を存続させるための「直耕」だと考えた。

「転定」のすべての存在は、もとをただせば「一気」(気一元論)が発現・変化したもので有機的に結合し、構成されたものであった。したがって、そこには優劣や差別などないというのが昌益の考え方で、そこから徹底した平等主義思想が導き出される。

「自然世」においては、人間本来の営みである「直耕」(農業)に励み、自然と一体

になって生活していけば、階級支配など不当な差別は本来ないとした。

ところが、こうした自然状態を歪めてしまう差別や支配を正当化する現実の作為を「私制」「私法」といい、その社会を「法世」と呼んでみせて、対峙させた。

自然にしたがって「直耕」に励み、支配や搾取のない平等な「自然世」が、不平等な「法世」の「二別」へと変わってしまうのは、自然に反する作為(私法・私制)によって、支配と搾取が正当化されているのだと考えた。

昌益は『統道真伝』や稿本『自然真営道』において、支配階級に奉仕して、衆人(民衆)の目を眩ます宗教者や学者など「不耕貪食」(ふこうどんしょく)者の欺瞞と本質を暴露し徹底抗戦している。

自然に反する「二別」(人為的な差別)を前提とする「法世」を、どうしたら「自然世」に戻すことができるのか。それを昌益は「私法盗乱ノ世ニ在リナガラ自然活真ノ世ニ契フ論」において述べる。すぐには解決できない問題であるから上下という「二別」を一応は認めるも、すべての者に田畑を与え上下ともに「直耕」すべきだとした。

すべての者たちの自給自足を原則とし、それぞれに必要なだけを生産して生活する。支配も不要だから税金の徴収はなく、余剰生産物を売買することもないから、貨幣は不要だとした。賞罰を規定した法律や生活からかけ離れた学問も必要ないから消滅するのだとも述べている。悪事をはたらく者や「直耕」を怠ける者の処断は一族の

者にまかされる。作家の倉本聰が昌益の「直耕」を「徴農制」へ発展させたいと願ったのも、村落自治たる「邑政」への思いがあったのかもしれない。

搾取や差別のない「自然世」の暮らしは、他者からの利益を掠め取る商業や、自然を略奪・破壊する鉱工業ではなく、人間にとって必要不可欠な食料を生産し、真の価値を生み出す農業だけだと認めていたのである。商鉱業が繁栄してくる当時の時代状況を皮肉にも活写している。

「自然ノ人ハ直耕・直織ニシテ、原野・田畑ノ人ハ穀ヲ出シ、山里ノ人ハ材、薪木ヲ出シ、海浜ノ人ハ諸魚ヲ出シ、薪材、魚塩、米穀互イニ易エ得テ、浜・山・平・里ノ人倫与ニ皆、薪・飯・業ノ用、不自由ナク安食・安衣ス……金ハ万欲・万悪ノ太本ナリ。之レ出デシヨリ転下黒暗・乱欲・妄悪ノ世ト為ル……故ニ此ノ商道ハ、不耕ニシテ利ヲ巧ラム諸悪ノ始メナリ。(商家は)悉ク無益有害、世ニ無クシテ人用ノ欠ケザル栄用ノ事ノミ業ト為シ、利欲ノミニ泥ミ、人性ヲ知ルコト無」(『安藤昌益全集』第8巻)

自然との調和・共存をめざすルソーのような昌益の思想は、環境問題を引き起こす近世近代化論に対するアンチテーゼとして、今も極めて重要な意味をもつだろう。

人間の真の豊かさとは何かを問われている現在、昌益思想のもつ意味を問い直すことは不可欠である。科学技術の進歩とか経済発展といったところで、環境を破壊し、自らの首を絞め、墓穴を掘っているだけにすぎないのかもしれないのだから。